

哲学的問い：人間がどうしても居れない所とはどこか（佐野教授；以下 S.Pr）

- ・「永遠の真生命」を得んと欲するの要求が「宗教的要求」であるが、永遠の死とは「永遠の真生命（永遠に生き続けるのではなく、神の生命を生きること）」に対するものとされる（S.Pr）
- ・永遠の死とはキリスト教では復活の希望のない虚無のことで、自己の存在が得られないあり方であり、仏教では地獄は孤独（「無所帰」；帰るところがない、居場所がない）と言うことである。
居場所がないことがわかったとき、人間は神に救われる（S.Pr）
- ・真の自己を知ることはできないということが、はっと気づかされたとき、生命の「転換」がおこる（生命の要求に転ずる）。それがすなわち「宗教的要求」である（S.Pr）
- ・大いなる生命とは神であり、人間の生命もその神の一部という意味において「神の生命を生きる」ということが言える（S.Pr）
- ・人間は苦しみに耐えることはできるが、無意味、絶望、虚無、孤独（無所帰）には耐えられない（S.Pr）
- ・日常では、そのことから目をそらすために自己実現を（不安のなかで）繰り返しているが、そのあとに待っているものは死である（S.Pr）。
- ・自己実現をあらゆる分野で、いやがうえでも繰り返して前に進んできた人間は、いったいどこに行こうとしているのか（それで幸せになれるのか）。
最後に待っているものは死であるのに、その自己実現の＜発展＞になんの意味があるのか、という点において虚無の問題が現れてきた（S.Pr）

4-1-2

- ・現世利益、念仏、自行、神助頼み、神罰を恐れる、安心（あんじん）のため、これらはすべて利己心の変形である。
- ・宗教的要求は大なる生命（神）の（が；主格）要求である。宗教は人間の目的そのものであって、手段ではない。
「横超（仏の本願力によって一飛びに浄土に往生すること）」により、思いがけなく救われる自分に気がつくことが肝要である（S.Pr）

4-1-3

- 意志は精神の根本的作用（意識されない）であり、我々の精神は欲求の体系であって、その中心が自己ということとなる。
- この中心よりすべてを統一していくこと、すなわち自己を維持発展することが我々の精神的生命（希望）である。
- しかるに我々（個人的意識）は個人的欲求を中心としてすべてを統一できるか。すなわち個人的生命はどこまでも維持発展することができるか。
- 個人的生命は必ず外は世界と衝突し、内は自ら矛盾に陥る。
 ここにおいて我々はさらに「大なる生命」を求めねばならぬこととなるが、宗教的要求とはかかる要求の「極点（本日の主題）」である。
- 主観的自己を立てて客観的世界を統一しようとするのではなく、絶対的統一はただ全然主観的統一を棄てて「客観的統一（神）」に一致することによりて得られる。

4-1-4

- 意識の統一は根本的要求であってその内容が多様になるほど「大なる統一」を要するが、この統一の極まるところが我々のいわゆる「客観的實在（神）」というもので、この統一は主客の合一に至ってその頂点（極点）に達するのである（神と一つとなる）。
 客観的實在（神）というものは主観的意識を離れて別に存在するものではない。
- かくのごとき意識の統一の（頂点～極点）すなわち主客合一の状態はただに意識の根本的要求であるのみならず、また実に人間の意識本来の状態である（神と共にある～神の元に帰る）。

哲学的問い

真、善、美を追い求める上で、真の対極には無知があり、善のそれには悪があるとすれば、

- ①美の対極にあるものはなにか
- ②たとえば、醜があるのか
- ③もしそうならば、醜は遠ざけるべきものなのか
- ④一例として、他の生物の命を食べている（そのことは考えない振りをしている）人間の姿はどうなのか。
 醜もまた悪と同様、なくすことはできないものなのか。